国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成29年10月1日発行 第41巻第10号通巻第481号

みんぱくは開館40周年を迎えます

月刊みんぱく

2017 10月号

特集

デジタル化するフィールドワーク

「フィールドワークのデジタル化」時代 飯田卓／デジタル時代の親族研究 杉藤重信
地図とGPSとデジタル測量 寺村裕史／フィールドワークと会話分析 高田明
牧畜民による映像・音声コンテンツ制作の日常化 内藤直樹

異文化理解のための新しい研究を期待する

杉田（すぎた） 繁治（しげはる）

一九七〇年の大阪万博の跡地に国立民族学博物館（民博）が創設されたのは一九七四年、一般公開は一九七七年であった。民博は博物館と同時に民族学の研究拠点でもあり、その第五研究部に「コンピュータ民族学」という部門が設置されていた。

まだコンピュータがそれほど世の中に普及していない時期で、ましてや大学の文系では使われる機会はほとんど無かった。当時いったい何をする部門か分かる人はほとんどいなかった。初代館長の梅棹忠夫氏はコンピュータの可能性をいち早く洞察し、これで旧態依然としている民族学に風穴をあけようとされたのではないかと思われる。機関全体をコンピュータによって改革する方針を打ち立てられたのであった。「ビデオテーク」もその一環であり、情報管理施設の設置による総合データベースの構築は他機関の先駆けであった。

私は一九七六年京都大学情報工学科の助教授から民博の助教授に転任した。民族学など全く知らなかった。東大の大林太良教授を代表とする共同研究「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」や、京大の石井米雄教授の「コンピュータによるタイ語古代法典（三印法典）の総辞索引作成」などいくつかの個別の情報処理に関係した。しかし「コンピュータ民族学」の役割は個別の研究にコンピュータを活用するだけに留まるものではない。むしろ研究方法としてコンピュータを如何に役立たせるかが問題である。

文化人類学は人類にとって大変重要な学問分野であるにもかかわらず何故かマイナーなものとしてしか捉えられていない。新しい問題意識と研究方法の導入が必要ではないか。四〇〇〇を超えるといわれる民族の生活様式と相互関係を明らかにする研究。各々の研究者は自身のフィールドでの研究をしているが、他のフィールドでのデータには疎いものである。あたかも全てのフィールドデータを自分が集めたデータのように利用出来、有効な比較研究方法を開発して新しい知見を得ることが出来ればより確かな言明が可能になろう。

今や宇宙時代の人類学・文明学である。宇宙から地上の数センチの距離を画像で眺められる時代である。高速通信や人工知能の発達によるわれわれの生活をどのように捉えるか。そこで何を研究するのか。多様で異質な民族生活が共存する為の本当に役に立つ異文化理解の方法などを提言していく役割を果たす必要があろう。

プロフィール
1939年京都府生まれ。国立民族学博物館名誉教授。京都大学工学部電気工学科卒業。「機械翻訳」で工学博士。情報工学科助教授を経て1976年国立民族学博物館に転任。研究部教授、部長、副館長を勤め2003年定年退官。その後、龍谷大学理工学部教授を6年間務める。著書『コンピュータ民族学』（共立出版、1997年）など多数。1971年情報処理学会論文賞受賞、1996年情報化月間通商産業大臣個人表彰。

月刊 みんぱく

10月号目次

1 エッセイ 千字文
異文化理解のための新しい研究を期待する
杉田 繁治

特集 デジタル化するフィールドワーク

2 「フィールドワークのデジタル化」時代
飯田 卓

4 デジタル時代の親族研究
杉藤 重信

5 地図とGPSとデジタル測量
寺村 裕史

7 フィールドワークと会話分析
高田 明

8 牧畜民による映像・音声コンテンツ制作の日常化
——アフリカにおけるデジタルメディアの受容
内藤 直樹

10 ○○してみました世界のフィールド
記憶に残った一枚の写真
小林 直明

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
鬼の目力
榎村 寛之

16 新世紀ミュージアム
ネパール民族誌博物館
南 真木人

18 手芸考
ネパールの異なるふたつのダカ織
高道 由子

20 ながなんぢゃ
育まれる「本当の名前」
左地 亮子

21 次号予告・編集後記

特集

デジタル化するフィールドワーク

実際に調査地に赴き、現地の人から話を聞いてものごとを観察する「フィールドワーク」。民族学・文化人類学における中心的な研究手法の一つだが、そのあり方は情報技術の進展を背景に時代とともに変化している。本特集ではデジタル化に焦点を当て、調査者の体験などを織り交ぜながらフィールドワークの今昔を紹介していきたい。

「フィールドワークのデジタル化」時代

飯田卓（いいだ たく）
民博 学術資源研究開発センター

戦後しばらくのあいだの日本において、フィールドワークをおこなうのは、主として民族学者や人類学者、生態学者に限られていたと思う。しかし二一世紀のこんにち、この語はあらゆる学術分野で認知されるようになった。とりわけ開発や教育、経営など、学術と実務が密接に連携する分野において、フィールドワークは不可欠な方法論とみなされるようになっている。もはやフィールドワークは、人類学の専売特許ではなくなった。

そのフィールドワークには、紙と鉛筆さえあればよい、とよく言われる。大学共同利用機関であるみんぱくが大学改革の煽（あお）りを受けて、予算維持と引き換えに研究活動以外の業務を要求されるようになったとき、一部の館員は、研究時間を維持するために予算削減を甘んじて受けようと主張した。じっさいにその主張が全面的にとおることはなかったが、この話は、フィールドワークにとって高価な機材がそれほど重要ではないことを象徴的に示している。

かつてみんぱくに設置されていた大型計算機（1980年代半ば）

デジタル化の波

ところが、じつのところみんぱくは、フィールドワークを基本とする学術分野に高価な機材を導入し、学術生産のイノベーションをリードした張本人（機関）にほかならない。本特集で杉藤氏が言及する科研プロジェクト「人文科学とコンピュータ」の代表者及川昭文氏は、みんぱくの運営委員や情報運営委員などをながらく務めた。また、みんぱくの内外から多数の民族学者が参加して進められたプロジェクト「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」は、多数にわたる各地の文化項目を大型計算機に入力し、文化領域を確定していくというもので、現代でも通用する解析結果をあげている。

みんぱくの「大型化指向」は、学界の主流となったわけではない。というのも、みんぱくが設立された直後の一九八〇年代から九〇年代にかけて、高度情報技術がパーソナル化し、機関の大規模経費をあてにしなくとも研究者個人がさまざまな機材を買えるようになったためだ。パソコンやデジタルカメラ、ビデオカメラ、GPS、衛星画像解析ソフト、空中撮影装置（ドローン）などがそれにあたる。

コンピュータ民族学研究例
杉田繁治本館名誉教授によりパソコン上に表示した文化クラスター地図（1988年）

その機材のほとんどは、デジタル技術をとり入れているので、みんぱくが開館してからこんにちまでの四〇年間は「フィールドワークのデジタル化」時代として総括できるかもしれない。

「デジタル化」したものは何か

本特集の各論では、系図の作図、地図の作図、会話の記録、記録行為の記録といった場面でこれらの機材や技術が駆使されていることを紹介する。本特集の趣旨は研究活動の舞台裏をデジタル技術という観点から紹介することであるが、一方で内藤氏が指摘するように、デジタル技術はもはや研究者が独占的に用いるたぐいのものではない。研究者が観察対象としている人びとも情報発信者なのであり、無数の情報授受の集積が文化的な状況を生みだしていると考えれば、彼ら情報発信者が授受する情報自体が解析の対象になりうる。そんなことは、つい最近にいたるまで、誰も――少なくとも、フィールド研究者では誰も――考えつかなかっただろう。

この四〇年間の変化としてもうひとつ強調しておいてよいのは、フィールドの人びとと研究者の関係も変わりつつあることである。これはデジタル技術そのものというよりも、通信全般の改善によるところが大きい。わたしが調査を始めた約二〇年前、マダガスカルでは自宅に電話をもつ人が少なく、個人のアポをとり付けるために大学や行政機関に何度も電話しなければならなかった。今なら携帯電話を鳴らすだけ、あるいは出発前に日本からメールを送るだけである。最近は、調査地の人もスマートフォンを使うことが増えているため、複雑な暦に従っておこなわれる行事を調査する場合でも、出発前に連絡をとって調査計画を立てることが可能になっている。

もちろん、デジタル機材が大きな役割をはたすようになっても、それがなければフィールドワークできないということはない。要は、デジタル機材によって、フィールドワークの進めかたが多様になったということだろう。そのことを念頭に、今後も個人研究者はさまざまな研究プランを立案し、みんぱくのような共同利用機関も大規模技術を導入していくと考えられる。

マダガスカルのケータイ小売業（2011年）

デジタル時代の親族研究

杉藤重信（すぎとうしげのぶ）　椙山女学園大学教授

手書きからデータベースへ

わたしがフィールドワークを始めた一九七〇年代半ばごろ、家系図は手書きであったが、一九八〇年代に入ると手書きではなくワープロソフトや描画ソフトなどを使って、「清書」ができるようになっていた。しかし、複雑な家系図になると線分の重なりや輻輳（ふくそう）など、この種の清書では解決できない課題が残っていた。

オーストラリアでのはじめてのフィールドワークは、一九八四年、アーネムランドに居住するヨロンゴ（あるいは、ヨルグ）の人びとのところでおこなった。彼らはウィリアム・ロイド・ウォーナーやクロード・レヴィ＝ストロースが研究をした複雑な親族組織でしられる「ムルンギン」の人びとである。幸い現地関係者から出生記録の閲覧と複写を許され、帰国後、母親が出産した子どもというカード形式のものであったが、表形式のデータとして入力する事ができた。過去に遡る母親たちの出生記録から抽出できた人数は男女合わせて約三七〇〇人に上った。この記録を使うと五代前まで彼らの系譜をたどることが可能だった。この膨大なデータをいかに処理するかがわたしにとっての次の課題となった。

最初の研究では、所属する親族カテゴリーや氏族名などの属性の組み合わせを単純に数えるなど以外の知恵は働かなかった。しかし、もし、このデータを親族データベース化できれば大きく飛躍するであろうことは想像できた。例えば、データベース上の二者の未知の親族関係を探し出したり、ヨロンゴの人びとの親族名称は複雑で七〇種類以上あるのでデータベース化していれば特定の人物からどのような親族名称で呼ぶかがわかるはずだ。また、三七〇〇人がすべて繋（つな）がいにしても、家系図を自動的に生成することができ、父系や母系の家系図を瞬時に切り替えることができるはずだ。一九九五年になって科研プロジェクト「人文科学とコンピュータ」が開始され、親族関係のデータベース化と家系図のデジタル描画のプロジェクトをスタートさせ、レヴィ＝ストロースにちなんで「アライアンス・プロジェクト」と名付けた。家系図は個々の要素（人類学の場合、○や△、＝といった記号）の空間配置を計算し、最適配置して描かなければならないが、「人文科学とコンピュータ」以降も、継続して親族データベースと家系図のソフト開発にとり組んだ。

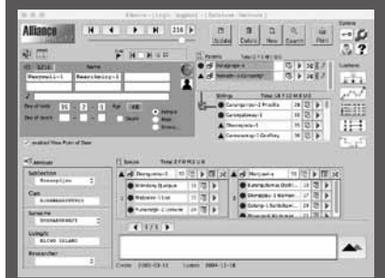
背景となる情報技術

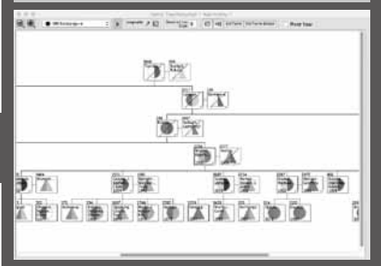
詳しい年代の記述は省くが、わたしが先に述べたプロジェクトにかかわったこの間、インターネット・サービスが開始され、省電力化・小型化・高性能化という情報技術の展開が進み、コンピュータをフィールドの現場にもち込みフィールドワークの補助手段とすることが可能になってきた。現在でも埃（ほこり）や湿度など情報機器にとって厳しい場所もあるが、それでも、最大の課題である電源も発電用のソーラーパネルをもち込めれば解決できる。そうした前提に立つと、親族データベースや家系図のみならず、コンピュータの使用を前提としたフィールドワークの支援ツールの開発は、フィールドワーカー支援という立場からすると焦眉の急を要する課題と思われる。

この間、家系図を描くグラフィクスの技術も大きく展開を見せた。コンピュータの種類やオペレーションシステムによって、従来はそれぞれに対応するプログラム言語を使って開発しなければならなかったが、最近の動向としては、汎用的に利用できるプログラム言語が開発され普及した。また、インターネット・サービスの普及によって、コンピュータの種類やオペレーションシステムに依存しない、エクスプローラーやサファリといったブラウザを使って、データベースやグラフィクスが描けるようになってきた。

知識と連携、そして未来へ

現地社会は社会変化に伴って親族知識に関する世代格差が大きくなっているように思われる。そうしたなかで親族データベースの構築は、彼ら現地社会の人びとにとっても重要な課題のはずだ。アボリジニ・コミュニティでも複数の親族関係データベース・プロジェクトが作られたが、プライバシーの問題やクラン（氏族）間の政治的な思惑も絡んで、必ずしもうまくいっていない。一方、移民してきた白人社会では親族関係のデータベース化はグローバルに展開していて、たくさんのデータベース・サービスが存在し、系譜を出身地まで遡って見出すことができる家系図サービスも、ネット上に多数存在する。しかし、こうしたサービスには、西欧社会の親族概念がもち込まれているように思える。例えば、祖先は父系もしくは母系のどちらかをたどる西欧社会に対して、アボリジニの親族概念は、父系と母系が有機的につながりあっているので、どちらかを選択させることは望ましくない。じつは、親族データベースソフトは市販のものもあり、アボリジニ研究者もこうしたソフトを使用している現状がある。つまり、西欧社会の親族概念をとおして彼らの社会を見てしまう傾向があるといえる。そうした意味でも、デジタル化時代に適合した親族研究が大いに期待されている。





上：「アライアンス」のデータ入力方法のひとつで、個人の両親、キョウダイ、配偶者のデータを記入する
中：当該人物から見て、母系をたどって表示する
下：インターネットで検索できる親族データベース・サービスのひとつ"Ancestry"

地図とGPSとデジタル測量

寺村裕史（てらむらひろふみ）　民博 人類文明誌研究部

文化人類学・民族学であれ、筆者の専門である考古学にとっても、フィールドワークのもっとも基本的かつ重要な情報は「地球上のどの場所か」という位置情報である。海外、国内を問わずフィールドワークを実施する際に、自分が今「どこの国（あるいは地域）で、なにを対象に（民族なのか、古代の遺跡なのかなど）」調査しているのか、という大前提が不明なまま現地を訪れることは、ほぼあり得ないといってよい。

では、自分が今地球上のどこにいるのかを知るためには、やはり「地図」が必須アイテムである。その場所に初めて入るときの事前準備として、まず調査地付近の地図を探し入手したうえで、最寄りの町からそこまでの移動ルートや手段を検討する。そして現地入りしてからは、歩いて行く、馬やラクダなどの動物に乗る、あるいは自動車を使うにしても、地図とコンパス（方位磁石）を頼りに正しい道を探しながら調査目的地まで赴くのが、一昔前までの一般的な方法であった。

5万分の1の紙地図とコンパス
（中央に置いてある物は地図上で距離を測るためのディバイダ）

けれども、地域によってはさまざまな事情（例えば、機密事項であるなど）により地図自体を入手することが困難な場合もある。また、現地にすでに研究協力者がいる場合や、現地住民に道を尋ねながら場当たり的に行けばよく、地図が必要ない場合もあるかもしれない。とはいえ、地図をもっているかいないかで、見知らぬ土地を訪れる際の緊張感が異なってくるのは確かだろう。

フィールドでの強い味方

ところが、デジタル技術が格段に進歩してきた現在では、そのような面倒な事前準備をしなくとも、ハンディGPSが一台あれば事足りるようになってきた。GPS（Global Positioning System）は、GNSS（Global Navigation Satellite System／全球測位衛星システム）のうちのひとつで、アメリカ合衆国によって運用されている衛星測位システムである。地球上いつどこにいても、自分が今現在立っている場所の位置情報（緯度・経度・標高）はもちろんのこと、デジタルコンパスも内蔵され、行きたい場所への方向やルート、日の出・日の入りの時刻なども教えてくれる。さらには、デジタル化された既存の紙地図をとり込んで、画面上に表示させることも機種によっては可能であり、筆者が調査でよく訪れる中央アジアの平原部などランドマークの比較的少ない場所では、特に有効である。

ハンディタイプのGPS
（左：地図表示、右：衛星の捕捉状況）

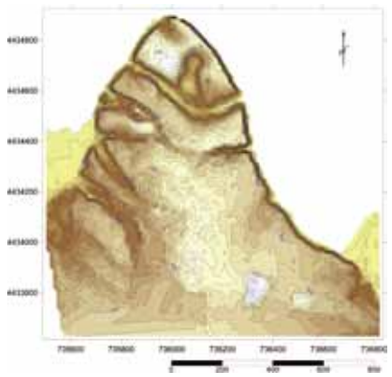
考古学においては、遺跡の大まかな位置は地図上で確認できたとしても、遺跡周辺の詳細な「地形図」が必要になってきた場合に、より高精度なGPSを用いて地形測量を実施する調査事例も増えてきている。測量機材さえそろえることができれば、地図も自分で作成できるような時代になってきたといえるだろう。

ただし、国によってはGPSの使用自体を認めていない国もあり、利用を認めていたとしても使用場所によってはあらぬ疑いをかけられる可能性もあるため、注意が必要である。もしGPSを使用できないとしても、今ではグーグルマップなどで対象地域周辺を表示し、それを印刷して現地にもっていくだけでも、地図の代用品としては申し分ないかもしれない。

「地図のない」場所への探検

デジタル技術の進歩で、位置情報の取得が格段に容易になり、調査を効率的におこなうことができるようになってきた。しかし、そうした利便性が増す一方で、いわゆる「探検」的なワクワク・ドキドキ感が薄れつつあることに、一抹の寂しさを覚えるのは筆者だけであろうか。

近代的な測量技術が確立され世界各地の地図が整備される以前は、地図が存在しないからこそ、自身の経験と勘に基づき、自分の足で未踏の地へ赴いて新しい道を切り開くといった、探検要素を多分に含んだフィールドワークがあったことは否定できないだろう。



右：高精度GPSで遺跡の測量をしている様子
（インド・カーンメール遺跡、2007年）
上：高精度GPSで計測した位置情報データを基に作成したウズベキスタン・ダブシア遺跡の等高線図

フィールドワークと会話分析

高田（たかだ） 明（あきら） 京都大学准教授

このエッセイでは、フィールドワークの記録・分析の手法のひとつとして会話分析を紹介したい。会話分析はもともと社会学で開発された手法だが、現在では人類学、言語学、心理学などへと広がっている。

会話分析では、動画や音声ファイルに収められた会話を逐一文字に起こし、それを基に体系的・経験的な分析をおこなう。会話の文字起こしでは、動画や音声を何度も視聴しながら、すべての発話について誰が発したものかを確かめ、その内容を丁寧かつ厳密にしるしていく。それは単にセリフを写しとるというものではない。会話中に見られる発話の重なりや間合い、吸気音や笑い、発声の大きさやイントネーションなども明記される。

会話分析の考え方

さらに会話分析は、相互行為がどのように組織化されているのかを明らかにするためにさまざまな概念を用いる。例えば順番交替システムは、日常会話を秩序づけているもっとも基本的なしくみだとされる。音声言語による会話では、複数の参与者が同時に異なることを話すことは避けられる。また話者は、その発話の終了が可能な点が近づくと、しばしば次の話者を明示的あるいは示唆的に示す。次の話者が示されなかった場合は、その会話における任意の参与者が次話者になれる。

こうして進んでいく順番交替システムを構成する発話のやりとりの最小単位が隣接対である。隣接対の例としては、挨拶ー挨拶、質問ー回答、要求ー受諾・拒否などがある。このうち前者を第一成分、後者を第二成分という。第一成分は慣習的に、第二成分としてひとつあるいは複数のタイプの行為を志向する。両者からなる発話の連なりを基本連鎖という。日常会話の分析でもっとも基本となるのは、その会話における基本連鎖を見つけることである。ただし、基本連鎖はしばしば単なる隣接対よりもずっと複雑な形で展開される。

上で見た順番交替システムや各種の隣接対は、規範的な特徴をもつ。言い換えれば、相互行為の参与者はこれらを参照して行為する。もっとも日常会話では、実際の行為が必ずしも規範に従うとは限らない。ある行為が言い間違えられたり、聞きとりにくかったりする状況が頻繁に生じる。そうした会話上の「トラブル」に対しては、しばしば修復が起こる。

写真1（上）：南部アフリカの狩猟採集民として知られるサンでは、養育者が赤ちゃんに写真2で示したような特徴的な声かけをおこなう慣習が認められる（1997年）
写真2（左）：サンの養育者が、変形した名前［例：tshe:po（ツェーポ）］で赤ちゃんに繰り返し呼びかけをおこなっているところ（1998年）

人類学における会話分析

会話分析は、会話の組織化にかかわる要素がおもに音声に限られており、それゆえ分析がし易かった電話における英語での日常会話から始

牧畜民による映像・音声コンテンツ制作の日常化

――アフリカにおけるデジタルメディアの受容

内藤直樹（ないとうなおき）　徳島大学准教授

まった。しかしその後、扱う言語や現象の範囲は著しく拡大してきた。例えば筆者は、人類学の視点から会話分析を用いて、乳幼児が上記のような会話のしくみにどう組み込まれていくのか［写真1、2］、特定の自然・社会環境の構造や資源が会話にどう反映されるのか、「恥」のような文化特異的とされてきた感情が会話のなかでどう構築されるのか［写真3］などについて分析・考察をおこなってきた。こうした調査では、従来から使っていたノートとペンに加えて、フィールドでも繰り返し再生可能なICリピート機能付きのカセットレコーダーや軽くて高性能なビデオカメラが重要かつ強力な道具となった。会話分析が磨いてきた分析枠組みは、人類学の調査対象を会話の内容からそのしくみへと広げた。これは、人類学者がフィールドで直面するリアリティの構築過程を理解するために大いに有効である。同時に、人類学者が体得してきたフィールドの知は、この分析枠組みをさらに豊かにできるだろう。

写真3：拍手の求めに応じない乳児に、父親が「恥ずかしいの？」という発話をおこない、その頭をなでたところ（日本、2008年）

南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ元大統領が二〇〇四年に語ったように、アフリカにおいても携帯電話はもはや富の象徴ではなく、生活の一部になっている。だが近年は「電話」に付随するデジタルメディアも普及しつつある。わたしが調査をしていた北ケニアの牧畜民アリアールの社会においても、現在ではインターネットに接続でき、音声・画像・映像の視聴・記録・保管機能が搭載されたスマートフォンが主流になっている。こうした携帯電話の高機能化は、同じモノの意味や役割が使用者によって異なりうることを意味する。

若者のスマートフォン

二〇一五年にアリアールの集落を訪問したとき、夕食を食べ終わると、若者たちが家族とともに携帯電話にストックされた動画や写真を見ながら談笑していた。わたしが「最近はやりの画像を見たい」と言うと、彼らはアルファベットの読み書きがほとんどできないにもかかわらず、スマートフォンのアイコンを手慣れた様子で操作してブルートゥース（デジタル機器用の近距離無線通信規格）機能を使ったデータ転送をしてくれた。

そうして最近はやりの動画ベスト10を転送してもらうと、例えばハリウッド映画『ハルク』のアクションシーンやポップ音楽のミュージックビデオでサバンナの動物たちが面白おかしく動くものなどであった。それらは制作者の意図や文脈とはまったく関係のない、切り刻まれた断片である。

また彼らは受動的な視聴者だけでなく、録音・撮影者でもある。例えば集落での結婚式や選挙等で披露されるダンスの様子は携帯電話で撮影され、人から人へ伝わっていく。これまでは他氏族や他民族の歌や踊りの様子や歌詞は口伝えで伝播（でんぱ）していたが、それがデジタル化された音声・写真・動画に変化している。ただしブルートゥース機能を用いてデータを転送しているので、以前と同じように直接会って情報をやりとりする必要がある。さらに彼らは携帯電話を使った「フィクション」も創作している。例えばこのときには長老とその妻の日常をテーマに、二人のどこかかみ合わないやりとりを楽しむ、ある種の「ホームドラマ」が繰り返し再生されていた。この作品は集落の若者によって創られた。そして異なる創り手によって、いくつかの「バージョン」が制作されていた。

デジタル化の多様性

アフリカの辺境地域においても情報のデジタル化は進展している。だが、情報のデジタル化と均質化は同義ではない。インターネットに接続できる携帯電話が主流になっても、アリアールの若者は互いが近くにいなければ通信できないブルートゥース機能を用いてデジタル情報を交換していた。また、インターネットにおけるデジタル情報のなかから、どのような情報がダウンロードされ共有されるのかという点についても地域性が見られる。さらに人びとは情報の受け手であるだけでなく、発信者でもある。発信される情報の内容にもノンフィクションだけでなくフィクションも含まれている。そして情報の受け手もまた、そうして創られた映像や画像、音声を視聴したうえで、あらたなバージョンの情報を創出していた。高機能化した携帯電話を媒介にしたデジタルデータ時代のさまざまな人びとが、同じモノを用いてどのような情報をいかに創出・共有しているのか、この時代ならではの比較文化研究が可能かもしれない。

牧畜民アリアールの集落（ケニア・マルサビット 2007年）

現在ではアフリカの周縁部においても、インターネットへの接続や動画・写真撮影可能な携帯電話が流通している（南スーダン・トリット 2012年）

近年の北ケニアでは、集落の雑貨店において携帯電話回線を用いた端末での決済方式が導入されつつある（ケニア・マルサビット 2015年）

○○してみました世界のフィールド

記憶に残った一枚の写真

小林 直明（こばやし なおあき）
民博 プロジェクト研究員

音楽グループの集合写真。右端は筆者（2005 年）

フィールドでえた発見・知恵は、たとえフィールドが変わっても活かすことができる。現在はコンピュータ、情報処理の分野に活動の場を広げている筆者が、アフリカ調査の経験を一枚の写真から振り返り、道を切り開くヒントを伝える。

今年の五月より「地域研究画像デジタルライブラリ（通称 D-PLAS）」というプロジェクトで働いている。そのむかしフィールドにおいて撮影されたスライド写真などをデジタル化・データベース化して、現在進行中の研究に役立ててもらうための支援プロジェクトである。年間数万点にのぼる他人が撮った写真を処理していかなければならない仕事で、当然のことながら一枚一枚の写真の背景にあるエピソードや撮影者の意図などに想いを馳せている余裕はない。ここでは普段の仕事から離れて、わたし自身が撮った一枚の写真をじっくりと見ていきたいと思う。

アフリカに通う理由

下の写真は今から十数年前に、フィールドのタンザニア、ダルエスサラームで撮影したものである。真ん中に写っているのはスネアドラム、その傍らにはハイハット・シンバルが写っている。これらはわたしがその成り立ちを調査していた下町コミュニティに暮らす若者たちが結成した、とある音楽グループの所有物である。

まずは左端に写っているハイハットを見てもらいたい。シンバルの縁が割れて、ところどころ欠けてしまっている。またその下方には上下二枚のシンバルを開閉するためのペダルが付いているが、こちらはどうやら木片で手作りしたパーツに交換されているようだ。修繕しながら、ずいぶん使い込まれた楽器だとわかる。次に、スネアドラムのヘッド（打面）の部分を注意深く見てもらいたい。これも先ほどのペダル同様、手作りの代替品で置き換えられている。写真ではわかりづらいかもしれないが、何かを縫い合わせて作ったのだろう、縫い目の線が縦横に、二重三重に走っているのがわかる。全体的に黒っぽい色だが、ヘッドの下半分に何やらイカのような白い影が写っているように見える。さて、読者のみなさんはこの「ドラムヘッド」の材料が何であるか、おわかりだろうか。

問題の写真。中央、スネアドラムのヘッド（打面）の材料は何でしょう？（2005 年）

この写真を撮ったのは、楽器の所有者である音楽グループのミュージックビデオを撮影しているときであった。合間にメンバーと雑談している際に、この「ドラムヘッド」のことが話題にのぼったのである。普段自宅の軒先で仕立屋を営んでいるメンバーが、どこかから「あるもの」をもらってきて、ミシンで縫い合わせて作ったのだという。わたしはそれが何であるかを聞いて思わずのけぞり、そしてとてもうれしくなって、すかさず手にもっていたビデオカメラ（の写真撮影機能）でこの写真を撮ったのであった。

あまりもったいぶっても仕方がないので、そろそろ答えを明かそう。……なんと、レントゲンフィルムである。そう言われてみれば「イカのような白い影」は「骨折した手首」のようにも見えてくる。まさか使用済みのレントゲンフィルムにこんな使い道があったとは！　わたしはこういった工夫、人びとが経済的に貧しい暮らしのなかで限られた資源を活用しながら、創造的になんとかやっていっているところを発見するたびに、「ああ、すごいなぁ」とつくづく感心する。自分がはるばるアフリカまで何度も通っている理由のひとつは、まさにこれであろうと改めて思うのである。

フィールドと教室を一枚の写真がつなぐ

ところで、わたしが感服してやまない、この名もない人びとの英知を何とよべばよいだろうか。文化人類学の用語で表現するとすれば、「ブリコラージュ」が適当だろう（ありあわせの道具と材料を用いて自分の手で何かを作りあげたり繕ったりすることで、理論や設計図に基づいてものを作るエンジニアリングに対置される概念だ）。「ブリコラージュ」に似たことばで、最近特にビジネスの世界において注目されるようになった「ジュガード」も捨てがたい。「ジュガード」はもともとインドのパンジャーブ語で、荷車にディーゼルエンジンを載せて作った急ごしらえのトラックのことらしい。（当地の事情を伝える新聞記事などによると）普通の自動車を買う余裕のないインド北部の農民のあいだで広く普及し、公共交通機関の代役も務めているという。転じて「革新的な問題解決の方法」とか「独創性と機転から生まれる即席の解決法」を意味することばとして用いられるようになった。

わたしはこの写真とエピソードを、非常勤先の大学で担当している情報系の演習科目で紹介することにしている。情報処理の話は、とかくエンジニア的な発想に辺倒になりがちだと感じているからだ。「常識的なやり方では解決できないような問題に遭遇したとき、適当な道具や材料がないからといって簡単にあきらめてしまうのではなく身の回りにあるものを活かしてなんとか切り抜けていける能力、ジュガード的な精神をひとつの選択肢としてもち合わせておくことは、情報処理の分野に限らず人生のあらゆる局面において大切ではないだろうか？」といった趣旨の話である。「コンピュータの授業」に突然アフリカやインドの話が出てきて、ポカンとしている学生も少なくないのだが。

上：練習風景。手前のンゴマ（太鼓）やマリンバはメンバーの手作り（2005 年）
下：授業風景（2017 年）

タンザニア、ダルエスサラーム ★

開館40周年記念特別展
「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」
シーボルトが終焉の地ミュンヘンに残したコレクションをとおし、民族学博物館の父とも呼べるシーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえります。
会期　10月10日(火)まで
会場　特別展示館

■関連イベント
展示場クイズ「みんぱくQ」
シーボルト編
期間　特別展会期中

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展
「カナダ先住民の文化のカ――過去、現在、未来」
カナダは2017年に建国150周年を迎えました。同国と先住民との関係の変化に着目しながら、多様な先住民文化の歴史と現状、未来を紹介します。
会期　12月5日(火)まで
会場　本館企画展示場

■関連イベント
ギャラリートーク
日時　企画展開催期間中の月曜・木曜14時～
会場　本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券
※都合により時間帯が変更になる場合があります。

開館40周年記念新着資料展示
「標交紀の珈琲の世界」
伝説の自家焙煎珈琲店「もか」の店主、標交紀が集めたコーヒー関連資料をもとに、中東から日本へ伝わり、独自に磨かれた「珈琲」の世界を紹介します。
会期　11月14日(火)まで
会場　本館ナビひろば

みんぱく映画会　台湾映画鑑賞会
「祝宴！シェフ」
台湾の食文化をユーモラスに描く台湾映画から、食と社会との関係について考えます。
日時　10月14日(土)13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんぱく映画会
第38回ワールドシネマ
「火の山のマリア」
グアテマラの高地に暮らす17歳のマヤ人のマリアの運命をとおし、現代社会における先住民族マヤの問題を考えます。
日時　11月5日(日)13時30分～16時（13時開場）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

研究公演
「めばえる歌――民謡の伝承と創造――」
映像民族誌『めばえる歌――民謡の伝承と創造――』の上映と、民謡やわらべ歌の実演をおこないます。
日時　11月11日(土)13時30分～16時30分（12時50分開場）
出演　井上博斗、松田美緒、山口亮志
会場　本館講堂(定員450名)
※要事前申込、要展示観覧券

公開講演会
「料理と人間――食から成熟社会を問いなおす」
生態資源の利用、共食や分配等の社会的機能、味や食感を伝える調理の技術等、食に関わる様々な要素を考えながら、文明と文化の境界面としての料理を考えます。
日時　11月17日(金)18時30分～20時40分（開場17時30分）
会場　日経ホール(東京、定員600名)
主催　国立民族学博物館・日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力課研究協力係
06・6878・8209

公開フォーラム
「世界の博物館2017」
日時　11月3日(金・祝)13時～17時
会場　本館第5セミナー室(定員70名)
※要事前申込、参加無料、先着順
お問い合わせ先
研究協力課国際協力係
06・6878・8250

カレッジシアター
「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催　産経新聞社
共催　近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

インドネシアの伝統芸能ワヤン
日時　10月11日(水)13時～14時30分
講師　福岡正太(本館 准教授)

ベトナム、黒タイのいろり
日時　10月25日(水)13時～14時30分
講師　樫永真佐夫(本館 教授)
お申し込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です
教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・振興を図ることを目的として設けられ、今年で59回目を迎えます。この機会に、全国で開催される様々な行事に足を運んでみてはいかがでしょうか。
教育・文化週間ウェブサイト
(文部科学省ホームページ)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kyoiku-bunka/

●みんぱく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」の会期中に運行します。
運行日　10月10日(火)までの土曜・日曜・祝日、1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401

みんぱくゼミナール
日時　10月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場　本館講堂
定員　450名(当日先着順)
参加費　無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第473回
ジョージ・ブラウン・コレクションの軌跡をたどる
講師　林勲男(本館 教授)
みんぱくが所蔵するジョージ・ブラウン・コレクションをめぐる遺族の葛藤、所蔵博物館の危機、コレクションの転売・分散、そして新たなプロジェクトなど、約100年の歴史についてお話しします。

ブラウン自宅のコレクション
(N. ジョイス提供)

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。
10月1日(日)14時30分～15時　本館第7セミナー室
1962年、世界をめぐる旅
話者　信田敏宏(本館 教授)
10月8日(日)14時30分～15時15分　本館第7セミナー室
島に住む人類
話者　印東道子(本館 教授)
10月15日(日)14時30分～15時　本館第3セミナー室
ペルーの文化遺産を守る
話者　関雄二(本館 教授)
10月22日(日)14時30分～15時30分
本館第7セミナー室→ナビひろば
心の扉を開ける鍵としてのコーヒー
――パレスチナ・イスラエルでのフィールドワークから
話者　菅瀬晶子(本館 准教授)
10月29日(日)14時30分～15時　本館第3セミナー室
フィールドワークとケガ――ベトナム西北部調査より
話者　樫永真佐夫(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)。ただし、1日(日)、8日(日)、15日(日)、29日(日)は展示観覧券不要

国立民族学博物館開館・友の会発足40周年記念
みんぱく大集合
記念対談
「文化人類学と霊長類学――人類文化の普遍性をさぐる」
ヒトとサルはどこまで同じで、どのように違うのか、人類文化の普遍性と独自性について、語りあいます。
日時　11月4日(土)13時30分～15時(13時開場)
話者　吉田憲司(本館 館長)、山極壽一(京都大学 総長)
会場　本館講堂(定員450名)
※要事前申込(応募者多数の場合は抽選)、要展示観覧券(友の会会員は会員証提示)
※申込締切　10月20日(金)必着
※記念対談の前後に友の会会員限定の施設見学会、研究者との交流会をおこないます。
主催　千里文化財団
共催　国立民族学博物館
お申し込み・お問い合わせ先
千里文化財団
06・6877・8893
※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

訃報　野村雅一名誉教授
本館の野村雅一(のむらまさいち)名誉教授(七五歳)がさる九月九日に逝去されました。しぐさ、身ぶり、ボディランゲージなどの身体的コミュニケーションについての比較研究、南ヨーロッパにおける民俗文化の研究を専門とされ、文化人類学にとどまらず社会学、心理学など多方面で業績をあげられました。一九七八年から二〇〇六年の本館在職中に実行委員長としてとり組まれた企画展「みんぱくミュージアム劇場――からだは表現する」や、『しぐさの人間学』等多くの著作で研究成果を発表されています。また、本誌『月刊みんぱく』編集長も長期にわたり務められました。謹んでお悔やみ申し上げます。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会
【第90回民族学研修の旅関連】
巨石の島に生きる
――インドネシア・ニアス島の家屋と集落
講師　佐藤浩司(本館 准教授)
一万を超える島嶼(とうしょ)に二〇〇以上の民族が暮らすインドネシア。ここでは、島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋が生み出されてきました。なかでも独特の巨石文化と、船さながらに家屋が並ぶ壮大な集落景観が知られているニアス島では、今も人が溢れ、あたりまえのように日常生活が営まれています。ニアス島だけが何故、伝統的集落を維持し続けることができるのでしょうか。ニアス島を中心に、インドネシアの伝統家屋、そして建築文化財が直面する課題について考えます。
【東京】第120回 東京講演会
11月23日(木・祝)13時30分～14時40分
会場　モンベル御徒町店4Fサロン
※要事前申込(定員60名)、会員無料(会員証提示)、一般500円
【大阪】第472回 友の会講演会
12月2日(土)13時30分～14時40分
会場　本館第5セミナー室
※当日先着順(定員96名)、会員無料(会員証提示)、一般500円
※いずれも終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。
※第90回民族学研修の旅は2018年3月にインドネシアへの訪問を予定しています(11月募集開始予定)。

第76回体験セミナー
世界的嗜好品、コーヒーを知る
――発祥の地、アラブのコーヒー文化とUCCコーヒー博物館見学
講師　西尾哲夫(本館 教授)
日時　10月18日(水)【申込締切　10月2日(月)】
会場　UCCコーヒー博物館、UCC上島珈琲株式会社本社

想像界の生物相

鬼の目力

三重県立斎宮歴史博物館学芸普及課長　榎村寛之

資料名｜ナマハゲの面（赤鬼）
標本番号｜H0122399
地域｜日本
サイズ｜高さ 60cm ×幅 34cm ×厚さ 18cm

資料名｜トシドンの面
標本番号｜H0062048
地域｜日本
サイズ｜高さ 73cm ×幅 40cm ×厚さ 16cm

資料名｜儺劇用仮面
標本番号｜H0191117
地域｜中国
サイズ｜高さ 34cm ×幅 17cm ×厚さ 10cm

ロシアの文豪、ゴーゴリの短編小説に「ヴィイ」というものがあり、そこに、悪魔祓いの円陣に守られた者も見とおす、ヴィイという怪物が出てくる。長い瞼が地面まで伸びて、そばにいる者に上げてもらわないと何も見えないという魔物だとされる。麻野嘉史氏の研究によると、ゴーゴリの生まれたウクライナを含むスラブ地域には長い睫毛、眉毛をもつモノの伝承があり、邪視を象徴する造形だという（『増補改訂版ヴィイ調査ノート』、私家版、二〇一四年）。

◆◆◆ 鬼の目の光 ◆◆◆

民博で世界の仮面を見ていると、たしかに目が強調されているものが多いことに気づく。世界的に、超時代的にも、視線は恐ろしいものであり、かつ頼もしいものでもあった。そういえば日本においても同様のことが指摘されている。例えば古代の宮廷でおこなわれた大儺（だいな・倭訓おにやらい）で目には見えない疫鬼を追う方相氏は「黄金四目」とされている。目はわざわざ金色にして、その光の力を強調していたのである。この方相氏の造形は古代中国の儺という祭に淵源があり、朝鮮半島にも伝わっていた。古代東アジアにおいては黄金四目の怪人が悪鬼を追う存在だった。

三重県斎宮跡にある、いつきのみや歴史体験館で再現されている追儺の祭

ところが四目の造形は東アジア各地で一〇世紀ごろから次第に衰退していく。日本では平安時代に「大儺」は「追儺」と改称され、方相氏は疫鬼そのものとみなされる。有角で牙をむくその造形はわたしたちの知る鬼の造形に影響を与えたと考えられている。さらに平安時代末期には、修正会とよばれる仏教儀礼のなかでも「追儺」がおこなわれるようになる、これもまた鬼追いであり、節分の豆まきの直接の祖先と考えられている。しかしこの儀式の主役は「豆」で、四つ目の方相氏はもはや出てこない。そういえば寺院の屋根には、奈良時代以来恐ろしい顔の破邪の面、いわゆる鬼瓦が座っていた。寺院では鬼は最初から二つ目なのである。

◆◆◆ 見通す者としての鬼 ◆◆◆

しかし注意したいのは、光る鬼の目がいろいろなことを見とおすモノとして重視された文化事例が今でも各地で見られることである。例えば男鹿半島地域で見られるナマハゲ、能登半島地域などで見られるアマメハギのような儀礼にあらわれる鬼。彼らは年の変わる時期にあらわれ、子どもたちを脅し、いい子になることを約束させる。それは行く年の悪事を見とおし、新年の到来を祝福するという来訪神の姿だといえる。似た意識は甑島のトシドンをはじめとした南九州から沖縄の島嶼地域にも見られ、折口信夫以来、日本の基層文化、外来者を神とみなすマレビト信仰と考えられている。その当否はここでは問わないが、注目したいのは、ナマハゲ面の目もまた金色をしており、その光る目が見えないものを見とおす、という意識がうかがえることである。

じつは本家の中国でも、宋代以降には、儺で悪霊を追うのは「開山」「鍾馗」など二つ目の怪人になるのである。目の数ではなく、巨大な目の光が破邪に繋がるという意識が日中双方で見られることは興味深い。

こうした習俗とは直接かかわらないが、本来年の瀬の忌籠りの時期におこなわれる祭りだったと見られる奥三河の花祭にあらわれる踊る鬼などにも類似した意識は見ることができるだろう。追儺の方相氏は鬼とみなされ、節分に追われる鬼となっていった。しかし鬼の目力が悪霊を追うという思想は、東アジア各地で今も生きているのである。

新世紀ミュージアム

ネパール民族誌博物館
नेपाल राष्ट्रीय जातीय सङ्ग्रहालय／ネパール

南 真木人（みなみ まきと）　民博 グローバル現象研究部

ネパールに暮らす一四の民族による、自文化を表現した手づくりの展示ブースなどが並ぶネパール民族誌博物館。開館から一四年、さらなる発展が期待される当博物館が創設された背景や存在意義について考える。

一九世紀、欧米において広範に設立された数々の民族学博物館は、植民地主義やオリエンタリズムへの批判、あるいは文化をある集団に備わる変わらないものととらえる視点（文化の本質主義）への懐疑などから、現在は一般に形勢がよくない。統廃合の憂き目をみた博物館もあるなか、多くの民族学系の博物館では古色蒼然（こしょくそうぜん）としたイメージから脱しようと、名称を変えたり、展示の手法を大胆に見直したりする改革にとりくんでいる。

他方、非西欧諸国においては、二〇世紀末から二一世紀に入り、先住民の文化と権利に対する認識の向上や民族のアイデンティティの高まりを背景に、次々とあらたな民族学博物館が建ち始めている。その多くは特定の民族集団が直接、設立や展示にかかわり、西欧で疑問視されている、民族の独自の文化を静態的に展示する手法が、さまざまな権利要求などの政治的主張と相まって戦略的に採用されている。つまり、文化がある民族のものとして囲い込まれ、政治的に利用される過程のなかに、民族の当事者による、当事者のための博物館の誕生というあらたな潮流がある。

国民としての民族の博物館

二〇〇三年に開館したネパール民族誌博物館は、ネパールにおいても増えてきた民族学系の博物館の嚆矢（こうし）とよべるものだ。同館はネパール語でネパール・ラーストリヤ・ジャーティーヤ・サングラールヤ（国民民族博物館）という。そこには国民の一員である先住民という国内向けの主張が込められており、他方、国外向けには英語で民族誌的と称し、文化人類学の先端的な博物館であることが謳（うた）われる。ラーストリヤ、すなわち英語でいうナショナルは、国立とも翻訳できることばだ。だが、この博物館は文化・観光・民間航空省の考古局が所管する国立博物館のひとつではじつはない。政府の援助を受けているものの、人類学者で制憲議会議員のガネシュ・マン・グルン氏らが創設した私立の博物館なのだ。

同館はカトマンドゥ中心のツーリスト・サービス・センター二階という好立地にある。だが、ガイドブックでもあまり紹介されておらず、団体ツアーの行程に入ることもまずない。とはいえ、その成り立ちと存在自体が、現代ネパール社会の動態を考えるまたとない素材となる。開館時、マガール、グルンなど一一の民族のブースから始まった同館は、二〇〇七年にラウテ、レプチャ、ディマールが加わり一四の民族の展示で構成される。ネパールには政府公認の民族が五九あるので、まだ道半ばだ。各ブースは、生活用具をあしらった室内の再現展示や伝統的な家屋のモデルなどで、それぞれの民族の特徴的な生業や信仰が表現される。

それぞれの展示コンセプトと構成を考え、調査・収集と演示を担ったのは、博物館が委託した各民族協会が選任した当事者である。彼／彼女らは、日本の国際交流基金アジアセンターの助成により、民族の伝統的な生活が典型的なかたちで示されていると判断した村の調査をおこない、資料の収集にあたった。ブース内のマネキンに向かって、目を細めながら「息子とうちの嫁だ」と愛情を注ぎ、手をかけた展示は、プロの演示業者が作るそれとは異なるほのぼのとした雰囲気に満ちている。民族協会は民族の言語・文学、民族衣装、歌舞、伝承などの文化を見出し、発展と継承を促す活動をしているが、博物館はその披露の場のひとつとなっている。

高邁な理想のあらわれ

一四の民族の展示の他に、先住の民族ではない高カーストのブラーマンが執りおこなうヒンドゥー教のホーマ儀礼（火に供物をくべる儀礼）の場をあらわしたものと、仏塔のなかに仏教徒の拝礼の場をあらわした展示がある。前者はブラーマンが、我々も国民であり同館で自らの文化を見せる権利をもつと抗議してきたため配置されたものだ。グルン氏は「彼らの申し入れを仕方なく受け容れ、バランスに配慮し、仏教徒の展示も設けることにした」というが、この判断はネパールに暮らす人びとの諸文化を総体として見せる意味で正しいもので、かつ同館の価値を高めるものだった。社会的に排除され、虐げられてきたとされるマイノリティの民族が、彼／彼女らをこれまで排除してきた高カーストを排除しない寛容の精神。ここにこそ連邦民主共和国となった新ネパールにおける、この博物館の高邁（こうまい）な理想が表出されている。

スヌワールという民族のブース（2017年）

ネパール民族誌博物館が入るツーリスト・サービス・センター（2017年）

第二展示場の開設式典に集まった演示担当者（2007年）

ネパールの異なるふたつのダカ織

髙道（たかみち） 由子（ゆうこ）　京都大学大学院博士課程

色彩豊かな幾何学模様が織り込まれるネパールのダカ織は、同じ織物ではあっても開発援助やフェアトレードなどの影響を受け、東西でその発展に違いが見られる。新しい技術を誰がどのように選択するのか。人びとの織りに対する姿勢が、手芸のあり方を変えていく。

テーラトゥムで雑貨店の店番の傍らダカを織る女性（2015年10月）

ネパールを代表する布

ネパールを訪れたことのある人ならば、必ず一度はダカ織とよばれる布を目にしたことがあるに違いない。ダカ織とは、平織地に多色の糸を織り込んだ織物で、ネパールの男性が日常的にかぶる「トピー」という帽子に使われていることでよく知られている。手織りのダカ織は一日に数十センチしか織り進めることができないため、以前は国王などの限られた人のみが着用できる高価な布であったが、現在はネパール中で親しまれ、トピーの他にも、サリーやクルタスルワールといった民族衣装、ショールやポーチ、シャツ、ネクタイなどに日常的に用いられ、婚礼衣装に使う布としても人気がある。

代表的なふたつの生産地

ダカ織の産地はネパール全域に点在しているが、西ネパールのパルパと、テーラトゥムを中心とした東ネパールの各地が有名である。これらの二地域に、同じ「ダカ」とよばれる織物が広まった背景は異なる。パルパでは、一九五八年に当時の政治的有力者がインドで学んだ技術を基に織物工房を創設したのがきっかけとされる。彼は産業振興のために次々と他の工房創設にも尽力し、王室の注文を受けるようになり、パルパのダカは歌謡曲の歌詞にも登場するなどネパール国内での人気を獲得していった。

一方、東ネパールでは、一九八〇年代からイギリス政府の開発援助プログラムが実施され、当時から既に農閑期の補完的な収入手段となっていたダカ織の製作が、支援者の目に留まった。支援者は「同じダカは存在しない」と言わしめるほど豊かな織り手の創造性をなるべく活かしながら、新しい色糸を導入するなど積極的にも作りに介入し、東ネパールのダカ織を海外や首都カトマンズに広めていった。

ジャガード織り機を用いるパルパの村の工房（2015年9月）

織りにかける時間

現在、パルパではほとんどの工房で飛び杼（ひ）やパンチカードを使用して複雑な模様を簡単に織ることのできるジャカード織り機が導入され、インドから出稼ぎに来た男性が働いている工房も半数近くあり、物凄い速さで布が織られている。こうした国外の労働者を受け入れる理由には、二〇〇〇年代以降、ネパールから海外への出稼ぎが急増し、仕送りを手にしたパルパの多くの女性が骨の折れるわりには低賃金である織りの仕事を辞めてしまったという背景がある。

一方、テーラトゥムでも開発援助プログラムの際に、飛び杼を備えた織り機などが工房に導入されたものの、これまでと異なる織り方への抵抗が強く、織り手たちは使いたがらなかったため広まっておらず、生産性はパルパに比べて随分低い。商品価格はほとんどの場合、テーラトゥムの方が格段に高く、模様が細かいほど価格は上がる。テーラトゥムの店舗で調査しているときに、「もっと安いのはないの？」と客が訊（たず）ねると、工房主は決まって「テーラトゥムのダカは、パルパの機械で織ったものとは違って、手で織っているから高い。時間がかかっているんだよ！」と説明していた。

ネパールの男性が日常的にかぶるダカトピー（2015年8月）

テーラトゥムでは、一九八〇年代の開発援助プログラムとその後の流れのなかで、織り手が自然物や身の周りの道具から着想した模様の独創性や唯一性が失われ、工房ごとの簡易なパターンと化していった。しかし、当時の支援者が主導したフェアトレードが二〇〇〇年以降に中断してからは、工房での生産は存続しつつも、家庭内での生産が再び増加し始めている。家庭で機織りをする織り手は、工房が店舗で販売する糸から好きな色を購入する。模様は、店舗に置かれている商品を見本にしつつ、ほとんど織り手自身が決める。そしてできあがった布を再び店舗にもち込み、査定の上で買いとってもらう。このようなしくみによって、現在空いた時間に家で機織りをする人びとが近郊の村々にまで広がっている。

同じ名前の、しかし起源の異なるふたつのダカ織。産業として大きく発展したパルパのダカに対して、テーラトゥムのダカ織には、合間の時間に織り手が工夫をしながらゆったりと織り進めるといった製作のあり方が再び息づいているのではないだろうか。

育まれる「本当の名前」

What's in a name?

左地 亮子（さち りょうこ）　民博 機関研究員

日本の多くの人にとって、名前とは出生時にひとつ与えられ、その後一生たずさえていくものである。しかし、わたしが調査しているフランスのマヌーシュ（ジプシー（ツィガン）の一集団）は、出生届に記載された名前とは別の個人名を、ときに複数もち、それを「本当の名前」とする。

マヌーシュはたいてい、姓とは別にふたつの個人名をもつ。個人名が複数あることは、一般のフランス人のあいだでもめずらしくはないが、マヌーシュの場合、「パピエの名前」と「マヌーシュの名前（ロマノ・ラップ　ノム　マヌーシュ）（nom manouche）」という独特な区別がされる。

「パピエ」とはフランス語で「紙」を指し、マヌーシュは身分証明書、学校や社会保護制度に関する書類全般を「パピエ」とよぶ。つまり、「パピエの名前」とは書類に文字としてしるされる名前である。マヌーシュの多くは、フランス語話者であるが読み書きをおこなわない。また、彼らの母語「ロマネス」も本来文字をもたない言語である。つまり、マヌーシュにとって、文字とは共同体外部のフランス一般社会で使用されるもので、出生の際にすべての親が子の名前として届け出る「パピエの名前」も共同体の外で流通するものである。「パピエの名前」は、一般のフランス人と同様のクリスチャン・ネームで、家族のなかで同名者がいることも多い。しかし、そもそも共同体内部で用いられないので、「パピエの名前」をめぐる不都合は特に生じない。

代わりにマヌーシュ共同体内部で用いられるのが、マヌーシュ語で「ロマノ・ラップ」とよばれるマヌーシュの名前である。こちらは、事物の名前（「中国人」を意味する「シノワ」、「少年」に由来する「ギャルソネ」）や意味をもたない名前（ジャーメ、グドゥ、ブーバ等）など多種多様な響きをもち、「本当の名前（ヴレ　ノム　vrai nom）」ともいわれる。命名の時期や命名者に関する決まりはなく、「いつの間にかこう呼ばれていた」という人、またふたつ以上の「本当の名前」をもつ人も多い。マヌーシュが重視するのは、その「本当の名前」が個人にたったひとつあることではなく、共同体内部の誰とも重複していない「その人固有のもの」である点である。結婚などによりあらたに共同体に入った人が、既存メンバーと同じ個人名をもつことはある。このこと自体は仕方がないとされるが、気をつけなければならないのは、同名者が亡くなったときだ。マヌーシュは死者の名前を口にすることを禁じているため（代わりに、「誰彼の父」「親愛なる祖父」などと表現する）、死者と同じ「本当の名前」をもつ人は、もはやその名前を名乗ることはできない。したがって、もうひとつの「本当の名前」が活用されたり、あらたな「本当の名前」を与えられたりすることになる。

マヌーシュは、「本当の名前」を「あだ名／ニックネーム（シュルノム surnom）」ともいう。なぜなら、その名前は、書類にしるされる「パピエの名前」とは異なり、文字によって固定されない「音」の名前で、生まれてすぐかしばらく経って、周囲の人びとにその名前で呼びかけられ、その呼びかけに応答するという日常のなかで徐々に定着していくものだからだ（そのため、命名されても定着しない名前は「本当の名前」にはならない）。このように、「本当の名前」が「あだ名」であったり複数あったりする状況は、少し奇妙でややこしい。しかし、日々の他者とのかかわりを経て「本当の名前になる」という点で、マヌーシュの名前はまさに個人のアイデンティティと切り離せないものなのだ。

月刊みんぱく 2017 10月号

編集後記

デジタル化によって現地社会とのつきあいも変わった。と書き出すと、高尚なフィールド論になりそうだが、小生にとってのいちばんの変化は、金の無心が携帯電話に直接かかってくるようになったことだ。時差にかまわず午前3時に、ワンギリで（折り返し電話くれの意）。慣れとは不思議なもので、今では催促がこないと、先方が元気かかえって心配になる。一方、当方が海外にいるときに「〇日までに書類のご確認と提出を……」という日本からのご丁寧なメールに出会うと、血圧がはねあがる。

本号では、みんぱくの開館40周年をみすえて、デジタル化によるフィールドワークの変貌を中心に特集を組んだ。また次号は40周年記念号であるが、プレ記念号ということで、イラストレーターのスズキコージさんによる絵でさいわいにも表紙を飾ることができた。時代やテクノロジーが変化しようと、本誌が読者諸氏のご協力でなりたっていることに変わりはない。今後もみなさまからのご支援をお願いしたい。（丹羽典生）

●表紙：イラスト　スズキコージ

題名　「メラルザイルン王（MERALZAILN）」

古代民博城の地下奥深くの洞窟に、今も住むメラルザイルン王は、地上に這（は）い上がろうとして掘り進み、もともと左右 12 本ずつあった指も、画のようになりはて、両眼は、みごとに破裂し、命の水を飲みながら、復活の日を願っている！

次号の予告

特集

「みんぱく開館 40 周年」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

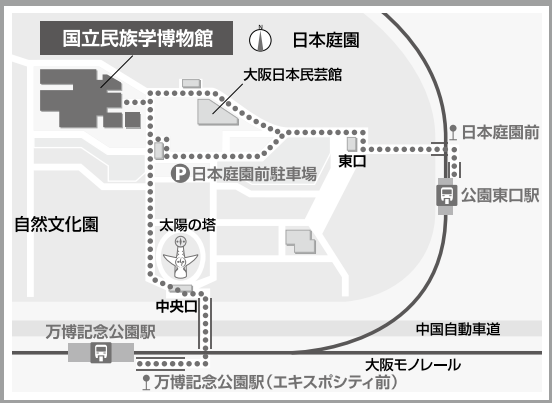
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

月刊みんぱく 2017 年 10 月号
第 41 巻第 10 号通巻第 481 号　2017 年 10 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　丹羽典生（編集長）　寺村裕史　三島禎子
南真木人　山中由里子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
https://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
https://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology